

上野国・戦国時代その4 剣聖・新陰流上泉和泉守信綱

赤榛分水工から赤城山南麓を東西に延びる赤城幹線の赤城南麓地域は、戦国時代中期まで鎌倉時代からの名門の大胡氏が治めていました。この大胡一族の中で剣聖と謳われた上泉伊勢守（信綱）がいました。信綱は新陰流の開祖であり、戦国時代以降の剣術に多大な影響を与えた武人でした。

1. 大胡氏一族

大胡氏（おおごし）は、鎌倉時代から戦国時代にかけて上野国赤城山南麓で勢力を保持した武士の一族で、居城は大胡城（現在の大胡城址より300mほど西にある養林寺に館があったと伝わる。）で利根川支流の広瀬川・桃木川以東の現在の前橋市部を治めていた一族です。

治承・寿永の乱で源頼朝軍に集った関東各地の武将の中に大胡氏の名もあり鎌倉幕府のもとでは御家人として活動していました。

浄土宗を篤く信仰したことでも有名で、大胡小四郎隆義は京都滞在中に法然上人の知己を得て、大胡に帰った跡も深く浄土宗に帰依したとも伝わっています。大胡隆義、実秀親子は法然上人に手紙で質問を行っていて、その返答が「大胡消息」として存在しています。

室町期も観応の乱などで足利尊氏に与力して大胡城を中心に勢力を維持していましたが、次第に新田金山城（群馬県太田市）の横瀬氏に圧迫されるようになります。この頃の大胡氏には大胡城を維持するだけの力はなく、横瀬国繁によって攻略され、

横瀬氏配下の益田氏が現在の大胡城に居城するも享徳年間には赤石城（群馬県伊勢崎市）の那波氏との戦いにより落城し、新田郷へ逃れたと伝わります。



天文10年（1541年）金山の横瀬氏（由良氏）の勢力が強大となり領地を圧迫されるようになり、北条氏康の誘いもあって、大胡の地を捨てて江戸に赴き、牛込城にうつり牛込氏を名乗ったと伝わっています。ただし、その後も大胡氏の名は上野国の歴史の中で見えており一族のものが大胡氏を名乗っていたと思われます。

大胡郷は厩橋城にあった長野氏（厩橋長野氏）の勢力下に入り、大胡氏はこの地を追われ、長野氏一族が大胡氏を継承したとも伝わります。

大胡一族の上泉氏は山内上杉氏の配下として、大胡城支城の上泉城を支配して大胡城を保持していましたが、上杉憲政が後北条に追われて越後へ逃亡すると、後北条

の攻勢にあい大胡城を失ってしまいました。憲政から管領職と上杉の名跡を譲られた上杉謙信が関東統一を目指し関東入りを果たすとこれを支援し、北条軍を打ち破り、大胡城の奪還に成功しました。

武蔵に移った大胡氏は牛込氏を名乗り後北条の配下となりましたが、小田原征伐により北条氏が滅亡すると徳川氏に仕えて旗本となりました。

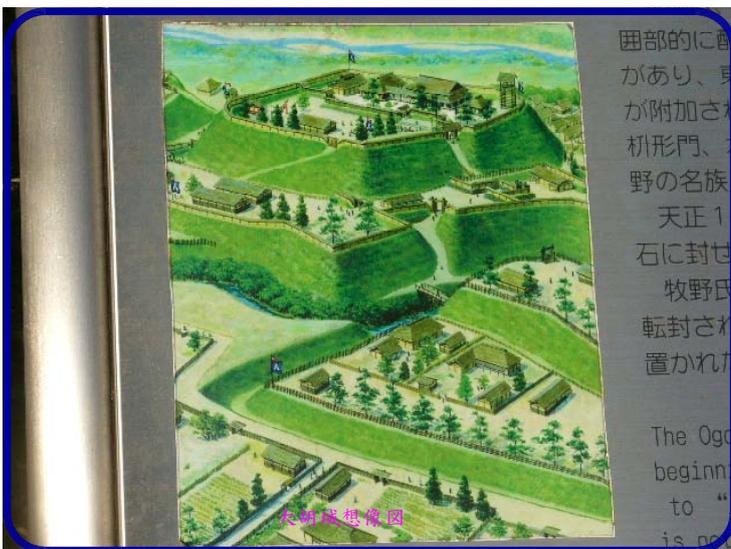
2. 上泉氏（かみいずみし）一族

上泉氏は室町時代から戦国時代にかけて上野国桂萱郷上泉（現：前橋市上泉）に勢力を持った一族で、大胡氏の一族とも伝わります。（系譜上の関係は不明）

上泉氏の系譜に拠れば、初代は一色義直の孫義秀で、当時没落していた大胡氏を復興させるため義秀がその名跡を継いで大

胡に入り大胡氏を名乗ったことに始まります。義秀は大胡氏を復興させると大胡城を譲り、自らは支城である上泉城に入り上泉氏を称しました。以後は大胡氏を補佐する立場で、大胡氏が大胡城を去った跡も大胡・上泉周辺に勢力を維持していました。

代々剣術に秀でていて初代義秀は中条流、時秀は鹿島流、義綱は鹿島神道流を修めていて、上泉信綱は新陰流を開祖したと伝わっています。信綱の子・秀胤は後北条に仕えましたが、その子・泰綱の代に越後上杉氏に仕官して米沢藩士となりました。信綱の三



男の行綱の家系は名古屋上泉氏となりました。

3. 新陰流開祖・上泉伊勢守信綱



大胡一族の上泉家に生まれた信綱は兵法家として陰流、神道流、念流などの諸流派を学び、奥義を究めました。その中でも陰流から新陰流を興しました。信綱の時代大胡氏の力は弱く、信綱は大胡城を守ろうとしますが、後北条の侵攻は激しく、大胡城を失うことになってしまいます。

その後信綱は箕輪城の長野氏の業政と業盛に仕え、武田信玄・北条氏康の大軍を相手にその武勇を誇り、長野の16本槍と讃え称され、長野業盛からは

「上野国一本槍」の感謝状も賜ったそうです。

上杉謙信が関東出兵するとこれに助力し大胡城の奪還を果たしますが、大胡城は謙信配下の北条高広（きたじょうたかひろ）を城主として入れました。しかし、この北条高広は謙信を裏切り、後北条に寝返ってしまいます。後に越相同盟が結ばれると謙信は高広を許し厩橋城主とします。

長野氏が武田信玄に滅ぼされると、信玄は信綱の能力を高く評価しており、家臣に加わるよう説得しますがこれを拒み、これ以降戦国武将としての功績、武勇は無くなりました。

箕輪城落城後は新陰流を普及させるため門弟足田文五郎らと共に諸国を流浪する旅にでます。

諸国流浪の際永禄6年（1563年）に上洛を果たし、この途中で伊勢の北畠具教（きたばたけともりの）を訪ね、奈良の宝蔵院胤栄（宝蔵院流槍術）のことを聞き、胤栄を訪ね立ち会うこととなりました。

胤栄は槍を信綱は袋竹刀を手に向き合いましたが、この袋竹刀は竹をいくつかに裂いたものを数本束ねてなめし革で束ねたもので、信綱の発案と云われ



上泉伊勢守信綱像

現代の剣道における竹刀の発明者となっています。

勝負はあっけなく終わり、宝蔵院流の槍術の祖と云われる胤栄を下しました。胤栄は即座に信綱に入門を請いました。

胤栄の剣友である柳生宗厳（やぎゅうむねよし：柳生新陰流の祖）も立ち会いを所望しますが、信綱の門弟がこれを下したと伝わっています。宗厳もまた弟子となることを請い、柳生の郷に信綱一行を招きますと、信綱はこの郷を気に入って長期の滞在中にその新陰流の技を柳生一族に伝授したと云われています。この2年後に宗厳と胤栄に印可状を与えたとあります。

その最期についても諸説あり、天正5年大和の柳生谷で亡くなり墓も存在すると伝わりますが、柳生には墓ではなく芳徳寺に供養塔「柳眼塔」があります。

★黒澤明監督「七人の侍」

映画好きならずとも「七人の侍」をご覧になった方は沢山おられると思います。その冒頭のシーンで志村喬演じる浪人・勘兵衛が旅の僧の袈裟を借り、頭を剃って僧に化け、盗人の人質になった子供を助ける場面がありますが、これは上泉信綱が修行に出たときの逸話をモデルに映像化したと云われています。

★新陰流の伝承

上泉信綱は、新陰流を広めるために全国各地を巡っていて、多数の門弟がいました。その宗家を譲られたのが信綱より「無刀取り」の公案を課せられた柳生宗厳であり、宗厳が伝えた新陰流は柳生新陰流として広く浸透していますが、分派をした訳ではなく、正式な流儀名は新陰流といえます。